

母語の文法構造が記憶と思考に及ぼす影響に関する実験心理学的研究

鮎本 一貴

1. 序論

われわれは日常生活を送る上で、多くの思考を母語に基づいて行っている。また、複雑な思考は言語を使用することなしに行うことは不可能であると考えられる。この言語と思考の関係について、最も有名な仮説の1つとして言語相対性仮説が挙げられる。言語相対性仮説は広義には、「言語の性質が思考の内容に影響を及ぼす」という考え方である。近年、このような言語相対性仮説を支持する研究結果が徐々にではあるが、蓄積されつつある。しかしながら、母語の語順が思考に与える影響を検証した研究はほとんどない。

本研究では、母語の語順が思考に影響することを実証した。そのために、同じ東アジア圏内に属しながら、母語の語順が異なる中国語と日本語を母語とする話者を実験参加者とし、彼らの風景画像における記憶の特性を比較した。本研究では一貫して言語を介在させない実験課題を採用した。その理由は、言語そのものの特性を調べるのが目的ではなく、人に既に内在化している言語と思考パターンとの関連を調べるためであった。

2. 実験 1

目的 中国語はシーンの中心物を先に述べ、その後背景情報を述べる傾向にある。一方、日本語はシーンの背景情報を先に述べ、その後、中心物を述べる傾向にある。これらの語順が思考や認知にも影響するのであれば、ある場面の画像を見たときに着目する順序や度合いも異なると考えられる。そこで、「日本語母語話者は中心物体よりも背景をよく見て記憶し、中国語母語話者は背景よりも中心物体に比較的多くの注意を向けて記憶する」という仮説を検証した。

方法 学習フェイズでは、場面の写真(背景と中心的物体で構成される学習刺激)が 1.5 秒間呈示され、実験参加者はその学習刺激の親しみ度合いを評価した。再認フェイズでは、学習刺激の中心物体が円形に黒く塗りつぶされた刺激と、中心物体の外側の背景(正円の外側)が黒く塗りつぶされた刺激が呈示された(再認刺激)。実験参加者は再認刺激の可視部分だけを手がかりに再認判断を行い、その確信度も評価した。

結果と考察 再認記憶成績では母語の効果は見られなかった。しかしながら回答の確信度は、背景が可視部分であった際に中国語母語話者よりも日本語母語話者の方が高かった。この結果より、僅かではあるが日本語母語話者が母語の語順の特性により、中心物体よりも背景により多くの注意を向けていたことが示唆された。

3. 実験 2

目的 実験 1 で着目した背景情報を述べる語順の違いの他に、主語、動詞、目的語といった品詞の順序にも着目し、母語の語順が再認記憶成績に及ぼす影響について検証した。

方法 実験 1 とは異なり、学習段階で学習刺激の可視部分を継時的に変化させることにより、母語の語順の効果の検証を行った。写真の周辺部から中心部へ向かって徐々に可視部分が広がっていく呈示方法と、写真の中心部から周辺部へ徐々に可視部分が広がっていく呈示方法の 2 種類であった。また、場面の中の主語、動詞、目的語、背景に相当する箇所が変化した再認刺激を用い、品詞の効果も同時に

検討した。つまり、独立変数は言語、呈示方法、再認時の変化部位(品詞)の3つであった。

結果と考察 言語の効果も呈示方法の効果も見られなかった。実験参加者の内省報告により、実験2の学習刺激の呈示方法では、目的語に相当する箇所にも中国語母語話者と日本語母語話者の両方が十分に注意を向けられていなかったことが示唆された。また、写真全体が見える時間がほとんど確保されていなかったため、仮説検証においてより優れた方法である実験3に移行した。

4. 実験3

目的 これまでの実験結果を考慮し、中国語と日本語の語順を考慮した呈示方法を採りつつも、学習刺激全体が見える時間を確保した上で、仮説の検証を行った。

方法 学習刺激の呈示方法は被写体の中心物体のみが先に呈示され、後に背景も呈示されて1枚の学習刺激として統合される呈示方法と、背景のみが先に呈示され、後に被写体の中心物体も呈示されて1枚の学習刺激として統合される呈示方法の2種類であった。最初の学習刺激が呈示されてから500ms後に次の学習刺激が呈示され、2枚の学習刺激が統合された。統合された学習刺激の呈示時間は1000msであった。つまり、最初の刺激が呈示されて、2枚の刺激が統合された学習刺激の呈示が終了したのは、刺激開始から1500msであった。以上により、学習刺激における目的語に相当する箇所に注意を払える時間を確保し、また、写真全体が見える時間を1000ms確保した。なお、再認刺激の呈示方法は実験2と同じであった。

結果と考察 再認成績に関する分析において、呈示方法の効果は明確には見られなかった。しかしながら、有意水準10%であるものの、両方の呈示方法において中国語母語話者は日本語母語話者よりも、再認時に動詞部分が変化した条件の再認記憶成績が良い傾向が示唆された。これらのことから、中国語母語話者では呈示方法の効果が効かないほど刺激の動詞部分に、日本語母語話者よりも注意を払っていたということが考えられる。

5. 総合考察

本研究を通して「母語の語順が再認記憶成績に影響を及ぼす」という仮説を明確に支持する結果は得られなかった。しかしながら、実験3では、有意水準10%であるものの、中国語母語話者は日本語母語話者よりも動詞に関する写真の変化に敏感である傾向が示された。つまり、中国語母語話者は日本語母語話者よりも、情景の動詞部分に多くの注意を払う傾向があるといえる。また、その傾向は各母語話者に深く内在化されていたため、本研究で設定した呈示方法の違いが影響を及ぼさなかった可能性がある。これまで、母語の語順が思考に与える影響を検証した研究がほとんどないので、本実験のように、今後更なる研究が行われることを期待する。(基礎心理学)